

ると云ふことも正しくない。運動は感ずることであつて、このことのみが第一のものである。若し感ずるを基礎とするならば藝術は模倣のものとなるであらう。藝術を印象の表現であるとしたクローチエの藝術は、この點に於いて模倣の藝術である。然し藝術は感情として求むべきである。又内界の表現として、内界の開展として、更に内界の成形として求むべきである。かくて感ずるが第一のものであるのでなく、感ずることが第一のものである。總ての方面に於いて、意識の開展はこの原形に基礎を置かなければならぬ。感ずることは運動に於いて意識として發展する。外界と内界とは運動に於いて顯はれる。即ち運動は外界を作ると同じやうに内界を作る。それは外界の原形であると同時に内界の原形だからである。かやうにして感ずるとは運動として意識を作り、又意識として運動を作る。第二の命題が美學の根本となり、第一のものが論理學の根本となる。即ち運動は二つのものゝ根本である。

更にコーエンに依るならば藝術に於ける律と均齊と鈞合とは時間と空間とに

關係するのみならず、それらを完成さすのである。律は時間を完成し、均齊と鈞合とは空間を完全にする。運動並びに運動感情がこれらのものを構成するのである。例へば均齊並びに鈞合は順次に來るものを測定しつゝ、並んで存在する者を構成する。律も亦二つの要素の分離と統一と、更にそのとの反覆から成立する。かやうに藝術の根本は運動である。運動は同時に純粹思惟に關係する。従つて藝術は思惟と共に働かなければならぬ。故に藝術の感覺的表現は數學的な整理や論理的な是正を必要とする。時間空間が藝術創作の根本形式である限り、それは純粹思惟と同じ性質のものであり、且つ藝術に取つて對象の論理的生産がその前提とならなければならぬ。さうである限り藝術はその法則と一致しなければならぬ。例へば作曲家は運算としてゝはないが、計算してゐると云ふことを意識しなければならぬ。かゝる意識なしに音樂的想像は存在しないのである。かやうに論理的なものを前提として内面的な感情を生産することが藝術の創作である (Aesthetik. I. Bd.)。

この考に於いて純粹感情は意識性の感情ではなく、その純粹化せる意識の内容であり、この感情は意識の根本的性質であつて、論理的な純粹認識とその根據を同じくする。従つて律並びに均齊の如き者も、與へられた對象に主觀の感情を移入するのでなく、それらは純粹感情の純粹生産である。與へられたものゝ知覺でもなく、又與へられたるものへの投入でもない。この點に於いて純粹感情の生産は感情移入の考に比して、更に根本的であることが出来るであらう。

更に感情移入は與へられたる對象を豫想するが故に、受動的な藝術の鑑賞を説明することが能動であるが、能動的な藝術創作の活動を説明するものではない。美に對する心理學的の説明も亦さうである。鑑賞の一面を説明しようとするも、創作の方面を説明しようとするものではない。然し純粹感情の生産は意識の純粹生産己外に何もものも認めないが故に、藝術の純粹な創作があるのみである。鑑賞も亦決して受動的な感覺並びにその反應ではない。鑑賞そのことが創作であるべきである。律を鑑賞することは運動を基礎として律を創作することであ

る。均齊も亦そうである。創作と鑑賞とは共に純粹感情の生産であると云ふ點に於いて一致する。この點に於いて二つを區別するものに比すれば、根本的であることが出来るであらう。

一一 時間空間及び運動

渾一なる感情生産の考に對して二つの疑問がある。一つは純粹思惟と純粹感情との生産に於ける共働の同題である。例へば律は共に運動であると云ふ點に於いて、兩者その根據を同じくすると考へられてゐる。然し純粹思惟に於ける運動と、律に於ける運動とは全く同じものであることが出来るであらうか。又純粹思惟に於ける根本概念は關係であるが、純粹感情の律、均齊、鈞合も同じやうに關係の概念を根據とする。 *Und was ist die Harmonie anders als eine Proportion? Und was*

ist die Proportion anders als ein Verhältniss? Somit hängt die Aesthetik im Grundbegriffe der Relation mit der Logik zusammen. (Cohen, Logik der reinen Erkenntnis, S. 40) 然しこの關係と云ふのは同じものであらうか。

純粹思惟に於ける運動並びに關係なる概念と律に於ける運動並びに關係と云ふことが同じやうに考へることが出来るであらうか。若しこれが全く同じであるならば、純粹思惟と純粹感情との區別は成立しないことになる。この區別が認められる限り、その根本概念の區別も認められなければならぬ。コーエンは感ずることが意識として運動を作り、又運動として意識を作る二つの區別を認めてゐる。そうである限りこの二つの運動は別でなければならぬ。少くとも別の過程として考へられねばならぬ。従つて純粹思惟の運動は外面的であり、律の運動は内面的であると云ふことが云はれ得るであらう。然し性質は別であつても、運動なる概念は一つであると考へられるかも知れない。然し律が要素の分離と統一と、その反覆とを創造すると同じやうな内包的な性質が、外面の運動に生産され

るとは思はれないのである。即ち運動なる言葉は同じであつても、その内面的な意味は全く別である。律そのもの、内包的な感情はそのもの自身に於いて考へらるべきものである。純粹思惟に於ける時間並びに運動は、この感情の外面的な條件であると云ふことは考へられるにしても、それがこの感情の内性そのものでない限り別の活動であると考ふべきである。寧ろ藝術に於ける時間空間並びに運動は、純粹思惟に於けるそれらと全く矛盾の關係に於いても考へ得られるであらう。

例へば繪畫の空間は數學物理學の空間とは矛盾の相に於いて説明され得る。「方と圓とを畫かば俱に成らず。左と右とを視ば並びに見えず。此れ論衡の説。獨り山水は然らず。方を畫いて圓を離るべからず。左を視て右を離るべからず。此れ造化の妙。文人の筆端は左も宜しからざるなく右も有らざるなきを妨げず」(甌香館畫跋)。圓い四角若しくは四角な圓は論理に於ける矛盾である。これは存在すべからざる者である。たとひそれがあり得るにしてもそれはたゞ一つの

假定である。然し藝術に於いては圓い圓、四角い四角は寧ろ抽象的存在である。藝術が眞の具象的である爲めには、圓は四角でなければならぬ。又方は圓でなければならぬ。方と圓とが同時に同じ空間に於いて構成される場合に、藝術が眞の具象的になるのである。方を書いて圓を離るべからずと云ひ、又左を視て右を離るべからずと云ふのは、この具象的な事實を説明するものである。藝術に於いて最も現實的なものが、論理に於いては最も實在的でないものであり、又論理に於いて最も實在的であるものが、藝術に於いては最もさうでないものである。従つてこれら二つの空間は全く別のものである。空間なる言葉は同じであるにしても、その内容は全く別である。論理的な空間の矛盾が藝術に於いて具象化されるのは、藝術の空間が論理の空間よりも、より根本的の空間であること考へられるかも知れない。然し其は別の問題である。論理の空間の矛盾に依つて藝術の空間が考へられる限り、少くとも兩者は別の空間であることが許されるであらう。

純粹思惟の空間と純粹感情の空間とが別のものであるとするならば、空間に於

いて考へられる運動も亦その内性に於いて全く別であること考へられなければならぬ。律の運動は無限に内包的なるものへの創造であるが、思惟の運動は寧ろ延長的なものへの創造である。印象派の繪畫に於ける家屋は、嚴密な機械學的法則に依つて畫かれてはゐない。然しその家屋はそれにも拘はらず安定であり、無限の内包的な者への創造である。機械學的な法則は純粹感情の生産に向つて、ある消極的な一つの條件であるかも知れない。然しこの者が積極的に純粹感情の内容を生産すると云ふことは出来ないのである。作曲家は計算することを意識すると云ふが、この計算は數量的な計算ではない。それは全く内包的な活動でなければならぬ。従つてそれは計算と云ふべきであるか否かも疑問である。それは作曲家は計算するのでなく、全く純粹に内包的なものを感じなければならぬからである。感ずることの自由が許される限り、その自由を遂行するのみである。たとひそれが數の割合に於いて不正確であるにしても、作曲家に取つては何ことでもないのである。それは論理的な不合理並びに矛盾は、却つて藝術をして眞の具象活

動たらしむるからである。

二 純粹感情の可能

感情の生産に對する第二の疑問は如何にして純粹感情の生産が可能なるかである。それは如何なる原理に依つて純粹思惟と別の生産であり得られるかの問題である。

感ずることが意識として發展するのは運動に於いてである。運動は外界を作ると同時に内界を作る。かくして感ずることは運動として意識を作るが、これが論理學の根本になるのであり、又感ずることが意識として運動を作るが、これが美學の根本になるものであると考へられてゐる。即ち感ずることが外部を作ると内部を作るとに依つて、論理學と美學との區別が生ずるのである。然しこの内外

の區別は如何にして生ずるのであるか。運動として意識を作る場合と、意識として運動を作る場合とは何に依つて異つて來るのであるか。換言するならば感ずることが外に向ふのと内に向ふのとは、如何なる理由に依つて分れて來るのであらうか。コトエンはこの根本理由を説明しない。従つてこれらのものゝ構成が可能である原理を見出すことが出來ないのである。

かゝる二つの活動はこれらの活動を可能ならしむる意識の根本原理を要求しなければならぬ。この原理なしには二つの活動が何故に分離するかと理解されぬであらう。感ずることが意識の原形であるとするならば、これは二つの別な根本原理に依るにあらざれば、二つの生産に進むことは出來ない筈である。この方向を決定するものは、結局カントの合法性並びに合目的性と云ふが如き根本的な原理に求めなければならぬであらう。この原理は意識の活動を純粹にし、同時に具象的ならしむるからである。従つて純粹思惟の生産を可能ならしむるものは、科學的活動の原理であり、純粹感情の生産を可能ならしむるものは、藝術的活動の

原理である。かゝる原理を認むるに非らざれば、感ずることの二つの發展の方向を決定することは出来ないであらう。

かゝる先天原理は又別の點からも要求されなければならぬ。藝術的活動の本質が感情であるとするも、コーエンの云ふやうに論理的な活動もその中に含まれるとするならば、これを統一する何ものかゞ求められなければならぬ。換言するならば論理的な運動並びに關係自體を感情化し、内面化し、藝術化する原理が求められなければならぬ。藝術的活動の中に觀念的な要素もあり、感情的な要素もあるとするならば、この統一が如何にして可能なるかゞ疑問である。相對的な要素の一つが、即ち感情の如きものが、直に他を統一することは出来ない。かりにそれが出来るとするならば、その一つのもは相對的關係を離れて、絶對的な立場に立たなければならぬ。この場合その一つのもを特に絶對とする原理が必要である。藝術の場合に於いては純粹感情が統一的な地位を持つと考へられるかも知れない。然し純粹感情がかゝる地位を持つのは、絶對的な立場にあるに非らざ

れば出来ないことである。何うしてこれがかゝる地位を持ち得るであらうか。對立的關係にある感情並びに認識能力がこれを決定することは不可能である。従つて純粹感情を絶對的なものたらしめる原理が要求されなければならぬ。この原理に依つてのみ純粹感情が具象的統一的なものとして、他の要素を統一し得るからである。この原理が即ち藝術的活動の原理である。

これらの理由に依つて純粹感情の考もそれが具象的たる爲めには、藝術的活動特有の先天原理に依らなければならぬ。詳言するならば、藝術的活動自體を純粹感情として説明しようとするならば、この感情をして具象的統一的たらしめる原理を承認しなければならぬのである。

已上は感情が美の實質であり、藝術の内容であると云ふ考に對する考察である。それらの各のものは、何れもかゝる美的なる感情を可能ならしむる意識の根本的態度を決定しなければならぬことに到着したのである。即ちそれを決定する原理を承認しなければならぬのである。原理そのものは前篇に於いて考察せるも

第三章 直觀の純粹性

一 直觀と個物

感情が美の實質であると云ふ者は、美が知力的な者、反省的なものでないことを顯はしてゐる。感覺と感情とを對置して考へる考へ方が、感覺よりも感情に美の要素を認めようとするのは、感覺が觀念的であり知力的だからである。知力的なものを否定すると云ふことが感情美學の一つの性質である。觀念は抽象され反省されて概念を構成するがそれは美の領域を愈遠ざかることになる。この點に於いて感情の美學は直觀の美學と一致する。

直觀なる意味は甚だ多様である。然しそれが反省的な者でなく、概念的なものでない點に於いて一貫してゐる。直接なものであつて反省を含まないことに於

いて、直観は感覺とも同じやうに考へられる。然しその感覺は感情から區別された感覺ではなく、感情をも含み同時にその表出作用をも含むものと考へられるのである。美が感覺的のものであると云はれる場合この感覺は感情を抽象された感覺ではなく、その内面に豊かな感情を含んでゐるのである。かゝる場合、美は感覺であること云ふ考と、感情であること云ふ考とは殆んど同じである。

心理學的な考察は感覺と感情とを區別し、美の實質を感情にありとする點に於いて分拆が明瞭であり、美の實質のある處を明かにするのであるが、然し感覺を離れた感情はあり得べからざる點に於いて、たゞ抽象の爲めに抽象したのであることも考へられる。これに反して感覺と感情との分化しない感覺、若しくは直観に美を認めやうとするものは、心理的な分拆に於いて甚だ明確を欠くが、然し具象的な形に於いて美を認めようとするものであることが許される。かゝる關係に於いて、美が直観であり感覺であること云ふ考と感情であること云ふ考とは、甚だ接近するものとなる。若し兩者に截然たる區別があり得るとするならば、感情美學は感覺

の内部にある感情に重きを置くに反して、直観の美覺は感覺的の要素に重きを置くこと云ふに過ぎないであらう。感覺と感情との分離が可能でない限り、兩者の區別はもとより明瞭ではないのである。

單純感覺の複合として美が説明される場合、それは極めて初等な美的感情に止るのであり、そして他の精神過程との結合に依つて複雑なものを説明しなければならぬことになるのである。美の形式感情より感情移入に進むのは、單純感情の複合已上に他の精神過程との結合に依らなければならぬ。Stimmungseinführungとか Natureinführungとか云ふのは、單純感情の複合に依るのみではなく、複雑なる知覺や表象や情調の結合を待たなければならぬ。初等美的感情が感覺的要素を離れないやうに、複雑な美的感情も亦觀念その他のものの結合に依らなければならぬ。

これと同じやうに美的判斷の對象は直接的な直観であること云ふ考 (Der Gegenstand des ästhetischen Urtheils ist also stets ein unmittelbar anschauliches Erlebnis. Cohn, Allgemeine Aesthetik. S. 23) に於ける直観も決して單純感情と單純感覺との結合と云ふが如き

單純な者ではない。直接と云ふとは反省のないと云ふものである。然し反省のないと云ふとは、單純な感覺感情に止ることではない。例へばレオナルド、ダ、ヴィンチの晩餐の畫を了解するのには、この畫の主題に付き色々の知識を豫想しなければならぬ。かゝる知識を條件として初めて美の判断に這入ることが出来る。かゝる判断の對象たる直観は決して單純感覺と單純感情との結合ではない。更にそれは複雑なものである。Zu dieser Unmittelbarkeit gehört das, was wir aus dem Schatze unseres Inneren heranzubringen, ebenso gut wie das, was die Empfindung uns darbietet. (Ibid. S. 21)。外部の感覺的の者とこれに加はる内部の者との結合である。感覺が單純感覺でなく觀念的なものに進む限り、これに對する内部のものも單純なる感情ではなく複雑なる主觀的活動でなければならぬ。かやうに複雑ではあるが然しこれが直観と呼ばれるのはこれが個物として眺められるからである。直観に於ける個物として眺めらるゝ限りそれは美であると考へられるのである。即ち概念は普遍的なものに關係するのであるが、直観は個物に關係する。個物に關係する限りそれは直接

である。設令多くの觀念的要素が含まれるにしても、それは豫備的のものに過ぎない。美の實質となるものは個物に關係すると云ふことである。従つて直接と云ふことは單純と云ふことでもなく、發生の順序に於いて最初のものとして云ふことでもなく、概念化しない個物として見ると云ふことである。

然し個物と云ふとは甚だ明瞭でない。個物とは抑も何であらうか。スピノーザに依るならば個物は有限物であり、且つ制限されたる存在を持つものであるが若しそれらの多くのものが同時に一結果の原因であるやうに、一活動に聯合するならば、さうである限りこれらの總てを一個物と考ふべきである。更にこれを單純にするならば獨立せる統一體と云ふことになるであらう。若しさうであるならば、かゝる個物は概念的存在にも當てはめることが出来る。國家も獨立せる統一體であり、科學も亦獨立せる知識の統一體である。従つてこゝに云ふ個物は、個物の直觀的なものと規定されなければならぬことになる。然し個物の考は直觀的なものゝ説明なるが故に、個物を説明する爲めに直観に依るのは同語反覆

である。

コロンは個物自身の價值に止るか、又はこれを超越するかに依つて、美的な直観と科學的な思辨とを區別しようとしてゐる。コロンに依るならば凡そ價值には二種の別がある。一つは他のものゝ手段としての價值であつて、これは *consecutive* であり、他はそれ自身を目的とする價值であつて *intensive* である。利用に關する價值は伴隨的であり、利用を離れたものが後者であつて内包的である。然しこれと同じやうに眞に關し善に關する價值も亦内包的である。従つて眞善美の價值の區別を考へなければならぬ。眞は判斷の場合に於けるが如く、個々のものゝ結合である。然し美は個物そのものに於いて完成するのである。美の内包的價值は個々の美なるものであり内包的である。然し其の内包的價值は常に個々の眞なるものを超越的である (*Ibid.* S. 27)。内在的内包的價值が純粹内包的である

(*Da die Immanenz gewissermassen die Ergänzung und Vollendung der Intensität darstellt, wird es erlaubt sein, den immanent-intensiven Wert auch als rein intensiven zu bezeichnen.*)。この考に依

つて美の對象たる直觀的個物の意味は明瞭である。即ち個物を超越し、他の個物との結合に於いて内包價值を見出す場合は科學的であり、これに反して個物自身に内在する内包的な價值を見出すのが、美的であり藝術的である。個物に對する超越と内在とのこの考へ方は、單に個物と云ふことよりも根本的であり、且つ方法的である。一つの花は個物である。然し多くの花を持つ一つの木も個物である。更に多くの木を持つ林も個物であり、多くの林を持つ山も個物であり、多くの山と多くの水を含む一つの風景も個物である。何が個物であるかを決定することは客觀的には不可能である。個物が一つの統一體と考へらるゝ限り、如何なるものも悉く個物たり得る。これに依つて美的直觀に於ける個物を規定することは出來ぬのである。この問題に對する解釋は個物の内在的價值を認めこのものゝみに止ることが美的であり、かゝる態度の對象になるものが直接な直觀であること云ふことになる。一つの風景は多くの山を含み、それらの山は多くの林を含み、それらの林は各多くの木を含むにもかゝらず、そのものゝ内在的内包的價值を見

出すことに於いて個物が成立し、直接な直観が構成される。それはそれは他の存在と對立的關係に進まうとしないからである。かくして個物の直接な直観なる考は確立するのである。

然し個物を超越すると云ふこと、それ自身の内部に透入すると云ふことに對して一つの疑問がある。個物が他の個物と結合することを求むる判断が科學的であると云ふことは許される。然し分拆判断の如きものは新しき内容を綜合的に創造しない限り、そのもの自身に止ると云ふことになるのでなからうか。三角形の内角の和が二直角であると云ふ命題は、三角形の概念に内在する者であり、又赤い花は花であると云ふ命題も、赤い花そのものに内在するものへ進んだのに過ぎない。これらの命題は三角形並びに赤い花の概念の内部に含まれてゐるものを、そのままに肯定したのに外ならぬ。即ちこれらの概念は内在的のものへと發展したのであつて、他の如何なるものへも發展したのではないと考へられる。然しこれらの命題を以つて、美的であり純粹内包的であるとすることは出来ないの

である。又これに反して一つの律は要素と要素との分離であると同時に結合である。即ち要素と要素との關係に於いて成立する。均齊も鈞合も亦要素と要素との關係である。關係である限り要素はそれ自身に止ることは出来ぬ。多様の統一と云ふ美の根本的活動は、要素の超越であるとも考へられる。かくて論理的なものにも内在的と考へられる點があり、美的なものも超越的と考へられる部分がある。従つて價値の超越的と云ふことと内在的と云ふことを以つて、兩者を區別することは出来ない。

更にAはAであるは無限の内在的發展であると考へられると同じやうに、又Aの無限な超越であるとも考へられる。これと共に律の要求である要素の分離と統一も、内在的であると同時に超越的である。論理的活動にも内在的と超越的とが成立し、藝術的活動にも内在的と超越的とが存在する。しかしこの場合共に内在的超越的と呼ばれ得るにしても、兩者はその意味を別にすることを注意しなければならぬ。AがAであるが内在的發展であると考へられるにしても、又超越的

發展であると考へられるにしても、それは論理的内在發展であり、又論理的超越發展である。律の活動が内在的發展であり又超越的發展であると考へられるにしても、それは藝術的内在發展であり又藝術的超越發展である。同じ論理的活動に於いて内在と超越とがあり、又藝術的活動に於いてその二つがある。單に内在と超越とを以つて兩者を區別することは出来ない。かやうに兩者の内在と超越とが論理的及び藝術的なる根本規定に依つて區別付けられねばならぬとするならば、これも亦同語反覆に終る。この欠陥を脱するには精神そのもの、根本活動を規定する原理に依らなければならぬ。コーンは眞を追求する活動に關し、認識論的に使用される超越的 transcendent を排し transredient を用ゐてゐるが、これはたゞ意味の細い相違に過ぎない。若しこれが重要であるならば、更に嚴密なる方法的根據を要する筈である。然しそれは規定されてゐない。結局何が直接な直觀であるか、又何が純粹内包價值であるかを決定するものは、精神活動の根本規約である藝術的活動の原理に依るべきである。コーンの内在的内包價值は藝術的活動

の内性を規定する點に於いて最も適切であるが、尙これを確立し且つ前に考へられた混亂を避ける爲めには、必ずこの原理に進まなければならぬであらう。

一一表 現

クローチエは直觀を知識の一つとしてゐる。この點に於いてそれは汎理主義である。藝術は感情でなく直觀的知識の表現である。藝術が若し感情ならば、それは受動的な者に過ぎない。知識には二種ある。一つは直觀的知識であり、他は論理的知識である。前者は想像に依つて得られ、後者は知力に依つて得られる。前者は個物に關する知識であり、後者は一般的なるものに關する知識である。換言するならば前者は個々の事物に付いての知識であり、後者は個物間の關係に付いての知識である。前者は映像を生じ、後者は概念を生ず。直觀を個物に關する

者とすする點に於いて、クロイチエは前のコーンと類似する。然しコーンは個物の内在價値に進むことが直接な直観であり、個物を超越して個物間の關係に進むことが概念的であるとしたのに反して、クロイチエは直観の特質は表現にあると規定してゐる。機械的な受動的な事實から生ずる偽の直観と、眞の直観とを區別する確實なる方法が存在する。眞の直観は表現である。表現に依つて客観化しないものは直観でなく、感覺であり自然である。精神は制作したり表現したりしなければ、直観を得ることは出来ない。表現のない直観は直観でない。誰でもラファエルのマドンナを想像することが出来たが、彼のみが畫布の上にそれを畫く技巧を持つてゐたからラファエルである。一般の人々は信じてゐる。然しこの考よりも嘘の者はない。普通の人々は毎日出會つてゐる親友の顔でも、他人と區別が出来る位に朦朧と知つてゐるに過ぎない。表現のないものは直観もないのである。直観的知識は表現的知識であつて、知力からは全く離れたものであり、且つ自律的のものである。この直観の實質は形式である。直観は感じられるものか

ら、即ち感覺の流れから、又心理的な素材から形式として區別され、この形式が表現である (Croce, Aesthetic, pp. 18-9)。この説明に依つて直観並びに表現が形式であることが理解される。然しこの形式とは如何なるものであらうか。

コーエンが考へてゐるやうにクロイチエの藝術は印象の表現である。表現が形式である限り印象は内容である。クロイチエに依るならば美を内容のみから構成しようとする考も誤であれば、又内容と形式との結合即ち印象に表現を加へて構成しようとする考も誤である。藝術的な活動が印象に附け加へられるのではなく、この活動に依つて印象が形成され純化されるのである。濾過具に入れた水が再び出て来る時は、同じ水であつても違つた處がある。それと同じやうに印象は表現の中へ再現する。かやうな濾過に依つて内容は形式になる。従つて美的な事實は形式であつて、それ已外の如何なるものでもない。考へられるのである。

この考よりするならば形式は外部より内容に與へらるゝものではなく、内容そ

のもの、内性を純化し再造するものである。従つて表現は内容の表現ではなく表現に依つて一切が構成されるのである。表現が印象を豫想する限り、コーエンの云ふが如くそれは模倣であると言ひ得られるかも知れない。然し表現は印象そのもの、ありのままな表現ではなく、印象の新しい形成なるが故に、單純なる模倣とすることは出来ない。印象そのもの、内容を純化する點に於いて、表現としての直觀が内的な創造であることは許せるであらう。

表現が印象そのものを表現するのでなく、印象を純化する内面的創造であるとするならば、その實質は精神の内包的性質を創造することである。印象の濾過が表現であると云ふのは、印象の純化に外ならぬ。何が純化であるかは内包的な意味に於いて決定されるべきである。一元的に内包價值そのものに依つて決定されるべきである。然るにこれを形式化と考へ、表現と考へるものは、内外の對立なき一元的な内包價值の創造を、内外の二元に分けて考へようとするのである。もとより内外の對立に依つて考へられなければならぬ過程もあり得るであらう。然

し印象純化の内包的創造そのものは、内外の對立を離れ、それ自身に於いて純化の意義を確立すべきである。少くともかゝる一元的活動が精神としては根源的である筈である。假りに純化が形式的と呼ばれ表現と呼ばれ得るにしても、それらは共に精神自體の純化に外ならぬ。形式と云ふものも内包的質の連續であり、表現と云ふのも内外對立なき世界に於ける表現であるべきである。然し形式と名け表現と呼ぶのは、内外の對立を豫想して初めて成立することである。従つてこれは印象の純化を示す上に於いて適切な顯はし方ではない。即ち表現並びに形式なる語は、印象の純化、内包的な質の創造を如實に示す點に於いて正確ならざる言葉である。従つて形式化並びに表現なる考をそのまゝに用ゐて藝術活動を示すならば、それは藝術活動の二元的な性質を示すに止るのであり、且つ又これに依つて根本活動自體を顯はさうとするならば、それは言葉としても、概念としても穩當ならざるものとなるのである。

更に又表現なるとは單に藝術に限らるべきではない。哲學も亦表現である。

哲學は概念の知識であるが概念は直観を豫想しなければならぬ。クロイチエに依るならば概念は事物間の關係であるが各事物は直観である。直観は概念なしに成立することが出来るが概念は直観なしに成立することが出来ない。概念も見方に依れば直観である。思考する人は彼が思考する限り印象を持ち情緒を持ち、それらは愛憎ではないが、苦痛と喜びとを作ふ思想自身の努力であり、且つそれには愛憎も絡むのである。概念が直観を持つ限り、それは又表現を持たなければならぬ。論理的に考へるのは同時に語ることである (To think logically is, at the same time, to speak. Aesthetic, p. 37)。この點に於いて概念的知識は直観的知識と性質を同じくする。大思想家は往々大文豪である。藝術と科學とは表現的な點、即ち美的な點に於いて一致する。それは概念的知識の表現が科學であり、直観知の表現が藝術だからである。各科學的な作物は亦藝術の作品である (Ibid. p. 41)。我々が單に科學を理解しようとする場合には、此藝術的な部分が隠れるかも知れない。然し理解の活動から瞑想の活動へと進むに従つて美的な者が明かになるであらう。

う。クロイチエのこの考に於いて、我々は藝術と科學、即ち直観と概念との結合を見出すことが出来る。然し藝術が科學そのものでない限り、他面に於いてこの二つの區別を考へなければならぬ。クロイチエは直観は直観自身に止るのに、概念は個々の直観の關係を考へると云ふ點に於いて、此二つを區別しようとしてはゐる。即ち直観は個物の知識であり、概念は關係の知識であるとする。然しこれが二つのものを明瞭に區別する根據でないことは、前にコーンの場合に於いて考へたと同じである。従つて科學と藝術との分岐點を明かにする爲めには、前に要求されたる藝術的活動の原理に依らなければならぬであらう。

三 美の純粹性

藝術的活動を感情に求むる考に於いても、又直観に求むる考に於いても、それら

の總てに渡つて一貫したものが認められる。それは藝術的活動は精神として一つの純粹性を持つことである。

複合感情に於いて藝術的活動の初等なものを見出さうとする心理學的考察に於いても、單純感情そのものを美とせず、單純感情の調和と云ふことを美の實質としてゐる。従つて感覺内容から起る感情ではなく、感覺の複合形式から生ずる感情であることになる。即ち美は快不快なる内容の感情ではなく、調和又は比例の形式感情である。快不快そのものでない點に於いて、美の純粹性が認められてゐるのである。

感情移入に於いても美は對象感情であつて、自己感情ではない。これは自己感情の遊離である。従つて對象感情は快不快でもなく、又生命維持の徴候としての感情でもなく、全くこれらを離れた感情であると云ふ點に於いて、感情の純粹性が認められてゐるのである。又純粹感情の生産に於いては純粹感情は意識の感情である。然し快不快は意識性の感情である。美の感情は意識性の感情ではなく

意識の感情である點に於いてその純粹性が認められるのである。更に又美は内包的價值であると云ふ考に於いては、これを論理的な眞と區別する爲めに、特に純粹内包的價值としてゐる。最後に直觀の實質を表現であるとすする點に於いても、表現になるものが純粹な直觀であつて、これなきものは感覺であり、摸倣であるとして美の純粹性を認めてゐるのである。これらの根本にある純粹性とは抑も何であるか。

上來の考察に依つてこの純粹性は畢竟内面的であり、創造的であり、且つ精神の本源的要求であると云ふことに歸着するであらう。經驗的のものでなく、受動的なものでもなく、精神本源の内面的創造と云ふ意味に於いてそれを先驗的と云ふことが出来るであらう。そしてそれは同じ意味に於いて具象的と云ふことも出来るであらう。即ち純粹性は先驗性であり具象性である。

經驗的心理學の場合に於いてさへも、形式感情は受動的な模倣的なものではなく、精神の創造的綜合に依る内面的生産であると考へられるのである。この創造

的綜合を先驗的な立場から考へるならば、コーエンの純粹生産に於ける律の説明となり均齊並びに釣合の註釋ともなるであらう。表現に於いても單に印象をそのまま表現するのではなく、表現は印象の純化であり、形式化するが故に、精神の内面的創造であるべき筈である。これらの内面的創造は悉く藝術的活動に於いて自我の關心を離れて活動する。たとひ藝術の創作が人格の發現であるとするもその人格とは關心的な自我ではなく、關心なき自我の人格である。即ちそのもの自身の爲めの創作であるべき筈である。この點に於いてコーンが論理的並びに道德的價值も内包的であるが、美の活動は特に純粹内包的であるとする意味が了解されるであらう。即ち美に於いて先驗的なもの、先驗、具象的なもの、具象が求め得られるのである。それ自身に於いて止り、それ自身に於いて満足する内包的な無限の創造、これが美の純粹性である。已上美の分拆に依つて、こゝに第二篇に於ける歸結と同じものに到着したのである。

第四編 純粹藝術的活動

第一章 純粹藝術的融合

一 純粹藝術的瞑想

精神は無關心の態度に於いてそれ自身の法則を實現する。これが純粹藝術的活動である。この活動に於いてのみ純粹内包的な價值が許される。我々はこゝに純粹藝術的活動の内容を考察しなければならぬ。それは無關心な活動なるが故に、そのもの、内容は精神自體の内容と同じである。従つて純粹藝術的活動の内容を考へることは、精神そのもの、内容を考察することである。

純粹藝術的活動は精神の内包的根源的活動なるが故に、物我の對立未だ生ぜざる根源的活動である。根源的と云ふのは時間的意味でもなく、又發生的の意味で

もなく、全く論理的意味に於ける根源的活動である。故にそれが自然に依つて惹き起されるか、又藝術品に依つて導かれるかを區別する必要はないのである。寧ろかゝる區分の未だ考へ得られざる根源的な至純の活動である。物我一如の活動に於いてたゞ精神自體の内容を創造するが故に、自然と藝術品との區別を認める必要がないのである。「造化に潜移して天と共にこの神駿滅没の處に遊ぶ」と云ふのは、純粹藝術的活動の創造である。天と共に神駿滅没の處に遊ぶと云ふことは、物我の對立なき世界に於ける無限の創造である。造化に潜移するのは自然を對象として直寫することではなく、物我一如の境に這入つて、造化と其の妙用を同じくすることである。神駿滅没の處は藝術の最高活動であると共に、あらゆる活動の根源的存在である。アウグステイヌスは神を *Principium* であるとするが、これはあらゆる一切のものに先立つと云ふのである。然し先立つが故に開發しないものであるとすることは出来ない。それは發生的の意味に於ける最初のものでなく、論理的根據としての最初のものだからである。あらゆるものは悉くこの根

源に歸着しなければならぬと考へらるゝならば、この最初のもものは最後のものではないければならぬ。天駿滅没の處はあらゆる精神活動の根據である云ふ意味に於いて *Principium* である。そして又あらゆる精神活動は悉くこの處に到着して、初めて自分を完成すると云ふ意味に於いて、最後のものである。自然を凝視すること、自然の法則を見出すこと、そして更に造化そのものに潜移することは、悉く天駿滅没の處に到らんが爲めである。又藝術品を凝視すること、これを了解すること、これらすべての過程は、作品に於ける直觀そのものを掴むことである。そして更に直觀を掴むことは、直觀自體であることではなければならぬ。直觀自體であることは天駿滅没の處に於ける無限の創造である。この創造は無限の自由である。作者の精神を了解せんとしたり、又それを批判しようとするが如きはたゞ直觀に到る道程に過ぎない。

主客の分れざる状態を以つて精神の未だ發展しない者であるとするのは、反省的開展のみを精神の發展と考へるからである。ジェームスの純粹經驗の如きは

主客未分のものであつて、これが他の純粹經驗と矛盾する場合、更に根本的統一を求めんとするが、これは精神の反省的開發の過程である。主客合一の純粹藝術的活動は、かゝる反省的開發の過程に置かれたるものではなく、無限に精神の内容を創造し得る自由の過程である。これは間接には、一切反省的な活動の援けを得て初めて到着し得らるゝ内面的創造の活動であるとも考へられる。それは最初にして最後のものなるが故である。主客未分の故を以つて、嬰兒の精神の如きであることは出来ない。又暗夜の牛の如きであることも出来ない。それはこれらは共に主客未分と云ふことを反省の意味に解釋し、内包的の意味に考へないからである。更に又この活動は心理學的な精神的要素であつて、未だ自我の念の構成されないものであることも出来ない。それはそれは單純なる要素の時間的な複合に依つて、具象的なものを構成しようとする抽象的考察に過ぎないからである。具象的精神に於いては、感覺が最初に考へられるのではなく、自我そのものが最初に考へられなければならぬ。自我が精神の根柢である爲めには、自我は純粹

自我でなければならぬ。純粹自我は物我の對立に於ける自我ではなく、物我包攝の具象的自我である。單純感覺の如く、單純なるが故に物我の對立がないのではなく、あらゆる對立を包攝するが故に、物我の對立なきものである。従つてこれら以つて、自我意識の構成されない、單純な精神であるとする事は出来ないのである。これらの發生的抽象的見解に對し、物我未分の境は、論理的に *Principium* であり同時に *ultimus* である。

従つて各の精神活動が最も至純なものに達するならば、すべて純粹藝術の中に融合すべきである。あらゆる藝術的創造と鑑賞とが、天駿滅没の境に到るを目的とする事は前に見た通りである。然し天駿滅没の處に於ける無限の創造は、瞑想として理性的な活動の究極する處であり、更に人格自體の實現として道德的活動の終る處である。そして又それは神そのものゝ體現として、宗教的活動の歸着する處でなければならぬ。

宗教的活動の究極する處は神との冥合である。是心作佛是心是佛の融合であ

る。祈る心と祈らるゝ神とは、この一心に合一して、無限に精神の創造が進展するのである。Jan van Ruysbroeck の次の心境は、かくの如き合一である。心の統一は肉體と精神とを一致させ、心と感覺とを結合させ、あらゆる内外の力を一つにし、すべてこれらを愛の結合の中に收める一つの紐である。この結合より、内面的なものが生れる。内面的なものは、人が内的な神の言葉を了解せんが爲めに、自らの心に向けられることである。それは感じ得らるゝ愛の火であつて、神の精神が炎々と吹き上げたものであり、且つ内部から人を鼓舞するものである (The adornment of the spiritual marriage, p. 62)。この心境は神との冥合であり、更にそれに於いて内面的なものが創造されるのであり、この内面的なるものゝ内容をなすものは愛の感覺的な火である。この冥合に於ける愛は、關心の愛ではなく、愛そのもの己外に如何なる自我も存在しない愛である。アウグステイヌスの煩惱なしに愛する (amas nec nestus, — confessionum I, 4.) に於ける愛である。彼我の對立なきが故に、情念を離れる。さうである限り、愛は天駿滅没の處に於ける精神其者の創造である。

考へられなければならぬ。これはやがて純粹藝術的活動の實質をなすものである。かくて宗教的冥合は關心なく情念なき精神自體の創造として、純粹藝術的活動であることが許されるのである。

瞑想として考へられる思考の活動も、この極致に於いては、自他の對立を去つて眞理そのものゝ無限な創造に融合する。スピノーザの神に對する精神の知的愛は、神が自らを愛する神の愛であり、換言するならば神に對する知的愛は、神が自らを愛する無限愛の一部である (Ethica, V. Prop. 36.) と云ふのも、亦知力に依る神との融合である。知的愛を外にして神なく、神を離れて眞の知的愛は成立しないが故に、神は即ち知的愛その者であり、少くとも其は神の活動の一部である。眞理は客觀的な事實その者ではなく、これを實現する知力である。眞理は知力であり、知力はそれ自身に於いて眞理である。知力が眞理を認識するのでなく、眞理が眞理自身を自覺するのである。認識する知力と認識される眞理とが對立するのではなく、眞理即ち知力、對象即ち認識として、精神の無限な創造がある。對立なきが故に

この創造は如何なる關心からも自由である。而も真理自體を検證する者は、真理そのものなるが故に、自らの内光に依つてのみそのものの存在を確實にする。この内光は精神そのもの、真理そのもの、無限な確實性であり、この確實性に對する必然の愛である。對立をはなれ、關心を離れて、精神そのもの、無限愛を創造する點に於いて、この瞑想は純粹藝術的活動である。カントの合法性の原理に依つて特別の領域を持つ科學的活動は、そのもの、内性を通じて、對象の真理自體と合一し、真理そのもの、自覺に依つて、無限の満足を見出すべきである。スピノーザに依るならば祝福 *Beatitude* は神に對する愛から成立し、この愛は第三種の知識より生ずる。この愛は精神が能動的である限り、それに關係されなければならぬ故にそれは徳自身である。更に精神がこの神的な愛と祝福とを樂しむに従つて益多くを知るのである (*Ethica*, V. prop. 42. Dem.)。第三種の知識は神の内性を通して神を考へる知識である。神の内性は無限の明瞭性であり、無限の確實性である。この光は愛であり、愛は同時に祝福である。これは精神そのもの、創造である。こ

の祝福に於ける瞑想が純粹藝術であると共に、宗教的恩寵である。これら各のもの、相違は、それらの外性の相違に過ぎない。内性に到つてはたゞ一つの藝術的な創造があるのみである。

二 創造的想像

オスカー・ワイルドの考へてある藝術と基督の生活に於ける一致も、この純粹藝術的活動に依りて根柢付けられるであらう。ワイルドはこの二つが一致するものを、想像的同情と云つてゐる。想像的同情は藝術の根源をなすものであるが、基督はこれを生活の間に實現したのである。彼は癩をを病むもの、膿を知り、盲たるもの、暗さを知り、快樂を求めて生活するもの、激しい不幸を知り、富めるもの、不可思議なる貧しさを知つた。この想像的同情が藝術と宗教との根本的な立

脚點である。この立場よりしてワイルドは、基督の地位は詩人の地位と同じである。と考へてゐる。基督の人類に對する考は想像より生じ、且つ想像に依つて實現されるのである。汎神論者に取つて神であつたものが、彼に取つては人間であつた。彼の已前には神々と人間とは別のものであつた。然し同情に依つて彼は自分の内部に兩者を體現することを感じ、自らの心持ちに従つて、ある時は神の子と名のり、又ある時は人の子と名のつたのである。かくして彼は歴史上に於ける如何なる人よりも、我々の不思議な性質を呼び醒したのである。

この考に依るならば、藝術家が様々の人格を感じ、これを創造するのは、恰も基督が癩を病むもの、膿を知り盲たるもの、暗さを感じ出すと同じである。その膿と暗さの眞實な點に於いては、藝術と宗教との區別はない筈である。同情の淺深はあり得るとするも、性質としての區別はないのである。云はゞ宗教的な想像的同情は純であり、藝術的同情は不純であると云ふとは出來ぬのである。又たとひ同情に淺深があり得るとするも、宗教的なるが故に深いのであり、藝術的なるが故

に淺いのであるとすることは出來ないのである。寧ろ宗教的と呼ばれ得るものゝ中に、淺深を區別すべきであり、純不純を分つべきである。藝術に於いても同じ關係である。宗教と藝術との兩者に於いて、その實質となるものは想像的同情あるのみなるが故に、その純なるものがより深いのである。精神の活動を評價し得る標準は想像的同情である。若し宗教的なる言葉を、藝術的と云ふ言葉よりも深い意味に用ふるならば、總べて想像的同情の純なるものは、悉く宗教的と云ふべきである。又その逆に、藝術的と云ふ言葉を宗教的よりも深いものゝ意味に用ふるならば、すべて純なる想像的同情は藝術的と云ふべきである。ロゲンが藝術の最高なものは、神秘的であり宗教的であると考へてゐるのは前の場合である。しかし若し宗教的なるものが、神人冥合の状態にあり、又は純化せる感動に満ちた状態にあるのを、藝術的と呼ぶならば、それは後の場合である。兩者共に、想像的同情の至純なるものに、最高の價值を認むるべきである。

藝術的なるものは、感情的なものであつて、精神の一面的な活動に過ぎないが、宗

教は實踐的意志の要求に依つて實現される活動なるが故に、綜合的なものとして藝術よりも卓越すると考へられるかも知れない。然しこれに對する答は簡單である。感情が一面的になると共に、意志も亦抽象的な精神の一過程に過ぎない。即ち全我の統一を離れて考へられる意志は、感情と同じやうに一面的である。それが具象的たる爲めには、全我の統一的活動に於いて考へられなければならぬ。具象と抽象との區別は、切り離された感情意志の區別でなく、全我の統一的過程に於いて動くか動かないかに依つて決定せらるべきである。若し感情が全我の統一的活動の過程に於いて動くならば、即ち具象的なもの、原理に依つて動くならば、その感情は具象的のものである。又若しこの原理を離るゝならば、精神として最も複合的な意志すらも、抽象的存在に過ぎない。従つて藝術を感情のみの所産であるとし、更にこれを一面的のものであるとするならば、それは許すべからざる誤である。

藝術と宗教との一致は、やがて又藝術と道德との一致である。癩を病むもの、

膿を知り、盲者の暗さを知るとは、想像的同情であるが、これは同時に又道德の實質である。道德的な同情と藝術的な同情とは、相對的な立場に於いては、ある區別を持つてあらう。然し同情そのもの、純粹な者が兩者の根柢である限り、道德と藝術との區別があるべきではない。リツプスは感情移入に藝術的の者と道德的のものとの區別を認め、關心なき感情移入は藝術的であり、關心あるそれは道德的であるとしてゐる。これは形成されたる藝術と道德との區別として、確かに承認しなければならぬことである。然し道德が最も直接にそのもの、根柢に這入るならば、主客未分の渾然たる同情そのもの、世界に進まなければならぬであらう。寧ろ道德はワイルドの所謂想像的同情を根柢として生れなければならぬ。それが關心的になるのは、主客對立の精神過程に入つてから後のことであらなければならぬ。癩を病むもの、膿を知り、盲たるもの、暗さを知ること自身は、主客對立の上の活動でなく、主客未分の境に於いて、それらの苦しみを創造するものである。膿に於いて、暗さに於いて、精神は至純な内包的な悲哀そのものを産む。この悲哀

を通して精神は精神たることの實質を見出す。悲劇の出生は斯の如くにして了解されるであらう。膿と暗さの創造は、たゞそれが想像的創造と云ふ點からではなく、精神實質の完成と云ふ點に於いて藝術的である。従つて想像的同情は精神的なるもの、創造を實質とするが、道德的同情はかくの如き實質を豫想しなければ、その意味の實質を失ふことになる。そは同情は畢竟精神的なるもの、造營に外ならぬからである。道德的同情が人間の同情である限り、それは精神の自由なる創造に依る、人間のなるものを豫想しなければならぬ筈である。人間のなるもの、想像的創造に依つて、藝術が可能であると同じく、道德が可能なのである。

人間的なるもの、想像的創造なきものは、眞の道德者ではない。道德の規範はこのことからのみ考へられなければならぬからである。藝術と道德とが相容れないとする考は、この根本の事實を認めないからである。普通道德は生命の自由創造を拘束する羈絆であると考へられてゐる。然しこれは眞の人間のなるものを創造し能はざる活動を呼んで、特に道德とするからである。若し道德が眞の道德

であるならば、即ち人間的なるもの、想像的同情に立脚する道德であるならば、同じ根柢に立つ藝術と撞着することはない。同時にこの逆も亦眞である。若し藝術が、人間的なるもの、想像的同情に立脚する道德と撞着する場合があるとすれば、それは、それは藝術が眞の藝術でないからである。藝術が眞の人間のなるものを創造せず、感覺的なるもの、領域に拘束されたり、若しくは自由な生命の創造に參與せず、硬化せる生命の形式的表現に制限せらるゝならば、その藝術は必ず眞の道德と撞着するであらう。さうである限り、それは眞の藝術ではない。藝術と道德とが撞着する限り、その何れか又は両者が眞のものでないのである。眞の道德と藝術とは、共に人間的なるもの、想像的創造として、純粹藝術的活動の上に立つべきである。兩者の區別は、藝術がそれ自身の満足に於いて、それ自身を追求するのに對して、道德は對立的な關心的なものを、その世界から統一的な世界に高めなければならぬ必然に置かれると云ふ點にある。この點は特に第二編に於いて考察したのである。

藝術に於いても、思惟に於いても、道德に於いても、それが最も純粹である場合には、悉く主客の對立を離れ、精神自體の限りなき創造に融合する。この融合が純粹藝術的活動である。然しこの究極の活動に於いて創造される者は何であるか。天駿滅没の處に於ける造化の働きであると考へられ、又眞理が自らに對する無限の愛と考へられ、更に神との融合である考へらるゝ者の内容は、抑も何であるか。即ち純粹藝術的活動はその状態としては主客滅没の融合であるが、かゝる状態に於いて創造される實質は何であるかを考察しなければならぬ。この問題は藝術に於ける自然、思惟に於ける眞理、道德に於ける人、宗教に於ける神の内性を決定することに外ならぬのである。

第二章 純粹藝術的活動の内性

一 精神自體

シェリングの云ふやうに、空間は長さとしても考へられ、巾としても考へられ、深さとしても考へられる。然し長さとは云ひ、巾とは云ひ、深さとは云ふもたゞこれ一つの擴りに過ぎない。それらの者の實質を考へることは、擴り其もの、空間そのもの、性質を知ることである。精神そのものをかりに空間にたとへるならば、藝術とは云ひ、道德とは云ひ、知識とは云ひ、何れも精神の長さであり、巾であり、深さである。それらの實質は精神其ものであるべき筈である。従つて藝術、道德、宗教、科學の實質を考察するとは、精神自體の實質を考察することゝ一致するのである。精神その者は何であらうか。

精神は精神そのものに於いて、その實質を自覺すべきである。即ちそれは精神が自己存在であり、自己思惟であることを考へるものである。自己存在は形而上學的の根本概念であり、自己思惟は認識的な活動の根源であり、更に他の何もの手段ともなることなく、自己目的の爲めに自由に自らの法則を展開さす活動と考へられるならば、それは倫理的な活動の根本となるであらう。何れにしてもそのもの自身に於いて存在し、決定される點に於いて、獨立的な自覺である。あらゆる精神活動の根本的な者を求むるならば、必ずこの自覺に歸着するであらう。反省的な思辨を通して精神がその實質を深めて行くこと考へるならば、この根本の自覺が不完全なものであつて、それはたゞ反省に依つてのみ完全に近づくべきであることを承認しなければならぬかのやうに思はれる。然しこゝに考へらるゝ自覺は、あらゆる反省をも包括し得る自覺である。それは精神が如何なる反省を重ねることも、それは畢竟精神の内部に行はれるのであり、自覺の一状態に過ぎぬからである。あらゆる精神はそれが如何なる状態であらうとも、「思ふ」である。「思ふ

こと」の實質は、「思ふこと」に依つてのみ認證さるべきだからである。精神が自己存在であり、自己思惟であり、自由であり、自己目的であることは、これに依つてのみ許され得るのである。

然し自己存在にしても、自己思惟にしても、自己目的にしても、それらは各一つの矛盾を含んでゐる。存在は何ものかに於いて存在するのである。有は無に依らなければ、有であることは出来ぬ。原子が存在するには、空虛が認められなければならぬやうに、存在は必ず無に依る。然し自己存在なる概念は、存在が存在として成立すべき第一の條件を拋棄するものである。従つてそのもの丈けに於いて存在することは、無定限の存在であり、存在と名けることも出来ぬ曖昧なる概念に逢着する。恰も摩擦を待つて進行する車輪が、その摩擦を奪はれたやうなものである。車輪は最早や進み得ないのみならず、車輪としての意味を失ふ。自己存在の概念が一つの矛盾を含むと云ふのはこの點である。これと同じやうに自己思惟も自己目的も同じ矛盾を含む。思惟は何ものかを思惟するのであり、何ものかを

待つて初めて思惟するのである。然し自己思惟はこの對立を離れる。従つて何ものをも思惟することは出来ない。自己目的に於いても同じやうである。目的は手段と對立してのみ考へられる。然しそれのみに於いて目的を考へると云ふことは、目的の意味を曖昧にする。従つてこれらの概念は、相對的な論理的な考に依るならば、その意味を失ふことになる。然しこれらの概念はこの相對的な矛盾に於いて終るのではない。これらの概念が變化するものに對して不動の一點を與へ、現象に對して本體的な根據を與へるのは、この矛盾の中に重要な他の轉機を含むからである。即ちこれらの者は、相對的な矛盾に依つて、相對的な意味を失ふ。然しこのことに依つて、相對的な如何なるものを以つてするも現はすことの出来ない、精神の内性を指示するのである。摩擦を奪はれた車輪は、最早や車輪の意味を失ふ。しかしそれと共に車輪は無限に自轉の過程に移る。他の如何なるものにも依らず、自らの能力を自由に自らに依つて自覺する。この自覺が精神そのもの、眞の實質である。それは他の者に依つて證明されることを要しない。

そして又他のものを待つて、その確實を確めやうとはしない。其もの、内面的な明瞭性に依つて、そのもの、眞の性質を自識する。「我思ふ我あり」が眞理であるのは、それが客觀的な事實に合するからではなく、それ自身に於いて明瞭判然だからである。スピノーザの妥當觀念(*idea adequata*)をして妥當觀念ならしむるものは、その客觀的性質にあるのではなく、内性の明瞭そのことにある(*Per idem adaequantum intelligo idem, quae, quantum in se sine relatione ad objectum consideratur, omnes verae idem proprietates sive denominationes intrinsecas habet. Ethica. II. Def. 4.*)。精神そのもの、實質と云ひ、又自覺と云ふのは、この内的な性質であり、明瞭其ことであるに過ぎない。空間が巾となり、長さとなり、深となつて顯はれるにしても、それらは悉く擴りであるやうに、精神は藝術となり、道德となり、宗教となり、思惟となるが、その何れの場合に於いても、その實質をなすものは内面の明瞭である。この明瞭性そのものを考へることが、藝術道德宗教思惟の實質を考へることである。

二 歡喜

自己存在であり、自己目的であるものは、そのもの己外に何ものも求めないが故に、そのもの自身に於ける無限の満足である。カントの意志のやうに、無限要求の爲めに、永遠に努力する者であるならば、それは眞の自己目的ではないのである。我々は道德が、無限の要求であるに反し、藝術が無限の自己満足であることを、上に考へたのである。藝術的なる者は、此性質に依つて、情神としての優位を取る。即ち精神の實質なる明瞭性は、藝術的な内性であり、無限の満足であり、歡喜である。

自己存在及び自己目的のものが、その相對的矛盾を脱して、内面的な明瞭性に於いて、自らを認證することは、畢竟この明瞭性自身に於いて、無限の歡喜を見出すことである。自己存在と云ふのは、單に形而上學的な一つ概念に止るのではな

く精神そのもの、歡喜を無限の内容とする。この内容を離れて、即ちそれ自らの満足と歡喜とを離れて、それは全精神活動を支へ得る根據を持ち得ないからである。スピノーザの神に對する精神の知的愛は、神との冥合であるが、神とは形而上學的には、自己原因自己存在として考へられるものに外ならぬ。従つて知的愛に於いて、神との冥合の可能は自己存在が畢竟知的愛其ものであり、眞理其もの、明瞭性であり、歡喜其ものだからである。この歡喜を離れて、具象的な神を考へることとは出来ない。若しこれを離れるならば、シェリングの考へてゐるやうに、神は抽象的な形式的な、一つの無底洞に過ぎない。あらゆる思辨に内容を與へるものは、この歡喜である。従つてスピノーザに於ける神の系統は、やがて歡喜そのもの、系統であらねばならぬ。シェリングは主觀客觀の同一である、無差別的なものを通して、美と眞との一致を考へてゐる (Philosophie der Kunst, § 20.)。然し主客合一の無差別と云ふのは、形式的な外面的な一つの規定に過ぎない。このもの、内性を内面的に規定するものではないのである。従つて形式的な無差別に於いて、眞美

の合一を考へるにしても、それは外面的な合一に過ぎない。眞の合一は、そのものの内性に根據を求めなければならぬ。神の内性は明瞭性そのものであり、歡喜そのものなるが故に、眞と美との合一は、このことに求めなければならぬのである。「神々はそれ自身、道德的でも不道德的でもなく、かゝる關係から離れて絶對幸福である」(Ibid. § 23.) は、たゞホーマーの神々に付いて云はるべきでなく、無限の *Identität* そのものに付いて許されなければならぬ絶對の内性である。

ペーメは創造の神祕を次のやうに考へてゐる。神は完全たらんが爲めに創造したのでなく、彼自らの表現の爲めであり、大なる歡喜と光榮との爲めであつた。この歡喜は創造と共に始つたのではない。精神的な旋律や、遊戯のやうに、大なる神祕の中に永遠の昔からあつたのであるからと。かゝる考は、歡喜が創造された者でなく、創造前の存在であるを認めようとしてゐるのである。若し完全ならんが爲めの創造ならば、そのとに依つて第一原因なる神が、不完全であることを顯はす。神は永遠の神祕の中に於ける完全である。歡喜はこの永遠な神祕の中に於

いて、第一原理と共に存在する。それは作られたものではなく、作るものである。第一原因そのものと質を同じくすると云ふよりも、寧ろ第一原因其ものである。歡喜を求めんが爲めの創造ではなく、歡喜なるが故の創造であり、歡喜を顯はさんが爲めの創造である。あらゆる藝術の創作も亦歡喜を求めんが爲めの創作であつてはならぬ。歡喜に依るの創作であり、歡喜を顯はさんが爲めの創作であるべきである。藝術に依つて歡喜を求めんとする創作ではなく、藝術に於いて歡喜を托すべき創作である(畫眼)。藝術のみならず、宇宙の創造は、歡喜そのものゝ表現であらなければならぬ。思辨の終る處は、瞑想の歡喜であり、道德宗教の終る處も亦神人冥合の歡喜そのものである。義務を歡喜となし、勞作を休息となす (*The love which fills my grateful breast, Makes duty joy and labour rest.*) のである。かくて全精神活動の根源も歡喜であり、終る處も亦歡喜である。

歡喜は又意志を超越する。プロチノスの研究に於いて Inge が云つてゐる (*The philosophy of Plotinus. II. p. 113*) 若し意志にして存在しないものを求める欲望を含む

とするならば、プロチノスの絶對なるものを意志であるとしてはならぬ。絶對は自らあらんと欲するものである。そは絶對は自らの創造者だからである。絶對の一者は自らを定立し、自分より已外のものであることを決して願はないのである。そは自らあらんと欲するものであると云ふよりも、寧ろ彼が欲するものを實在の世界に投射するのである。若し絶對を意志であるとするならば、それはそれ自身の原因であると云ふ意味に於いて、あり、その外に如何なるものも存在しないこと云ふ意味に於いて、あると。この解釋に依るならば、たとひそれが意志と呼ばれ得るにしても、對立的欲求を離れたものなるが故に、通常考へられたる意志の相對的性質を脱却するのである。意志にして、若しそれ自らの原因であり、又それ自身に於いて欲するものを實現し得るとするならば、それは無限の満足であり、無限の歡喜である。かくしてそれは、初めて自由の附與者たる意義を具へるであらう。慾望の爲めに制約されるものであるならば、自由の根源であることは出来ぬからである。

近代主意論は多様である。カントの實踐理性の優位もそれであり、ショウペンハウエルの生存意志も、ニーチエの權力意志も亦これである。然しそれらは、意志そのものに於いて、無限の安住點を見出すことは出来ない。ショウペンハウエルの意志は、解脱さるべき關心の根源であり、ニーチエのそれも亦あらゆる不安と苦惱との源泉である。カントに於いてすらも、道德意志は無限の精進なるが故に、それ自らに於いて無限の満足を見出すことは出来ぬ筈である。従つてそれらは、何れもそれ自身に於いて満足である歡喜を見出す者として、他に藝術的な活動を認めなければならぬ必然を持つ。主意論は努力の原理であり、支配の原理である。然しそれ自身に於いて、確實な根據を持つ自己原因の活動でもなく、自己目的の存在でもない。それは常に打ち勝つものと、打ち勝たるゝ者との對立を要求する。悠久なる自己存在の原理に依つて、すべてをありのままに認容するものでもなく、又この認容に依つてすべてを淨化する原理でもない。それは相對的なる活動を統率する原理であり得るとするも、絶對自由を根柢とし、創造前の第一原理に依つ

て精神そのものを確立しこのことに依つて萬有を認容するものではない。かくして絶對そのものゝ内性なる歡喜は、相對的な意志の活動を超越しなければならぬのである。

ドストエーフスキイがゾンマの教訓として教へるものは、敬虔な生活の究極は歡喜であると共に、精神そのものゝ歸趣も亦これであることを語るのである。「未來の爲めに盡せばいゝ。決して報酬を求めぬ。この世に於ける汝の報酬は偉大である。即ち正しき人にのみ許される精神の歡喜がある。汝の喜びの涙を以つて地面を濕し且つその涙を愛せよ。この恍惚の境を恥ぢるな」(The brothers Karanizov, B. VI, Chap. I.)と云ふのは、人間生活の根據が歡喜の恍惚にあることを説くものである。然しこゝに一つの問題が残る。こゝには正しいものに許される歡喜があると考へられるのであるが、然し正しいが故に歡喜であるか、又歡喜なるが故に正しいのであるかの問題である。正しいと云ふことは、何に依つて決定されるであらうか。上に考へられたやうに、完全なる觀念の標準が、客觀的特徴に依つ

て決定されるのではなく、内面的な明瞭性にあるとするならば、内面的な自覺を外にして、觀念の完全を決する標準はないのである。内面的な明瞭性が我々自身を欺くかも知れない。然しそれは、デカートのやうに、神の正直なると (veracitas dei) に信賴すべきである。これは思想の究極であり、あらゆる證明を超越する事實そのものである。しかしどうしてこのことが許されるであらうか。それは内面的な明瞭性が自己満足であり、何ものにも依らずして成立し得るからである。換言するならば、それが精神そのもの内性なる、無限の歡喜だからである。明瞭なるが故に正しいと云ふことは、歡喜なるが故に正しいのである。これに依つてのみ自存の意味を自覺するであらう。

藝術の形象はこの萬有の根柢にある歡喜を、形象の世界にあらはすことであり、道德はこの歡喜に進む努力を、その眞髓とすべきであり、宗教はこの歡喜に於ける無限の恍惚に融合することである。純粹藝術的瞑想は、この精神の歡喜そのものである。あらゆる藝術的活動が、自己目的であるやうに、歡喜そのものは自己目的

である。寧ろ自己目的なる概念は、歡喜なる内性に依つて、あらゆる矛盾を脱し、精神としての眞の具象的なるものを實現するのである。

三 統一的自我としての純粹藝術的活動

「祝福は神に對する愛から成立する。この愛は第三種の知識から起る」と云ふスピノーザの精神的な歡喜は、神の愛であり、それ自身に於いて精神の明瞭を自覺する活動に依るのである。若し歡喜が與へられたる感覺的な刺戟に依つて、生み出されたる一つの快感に過ぎぬならば、それはスピノーザに於いては、受動的な心の状態であり、又我々の具象的考察よりするならば、たゞ一つの切り離された抽象的な快感に過ぎない。それは全存在の根抵たる神を通して、惹き起されるのではなく、又自我そのもの、内性に基礎付けられた活動でもない。たゞ與へられたる

がまゝに、赤が興奮の感じであり、青が沈靜の感じであると云ふ迄である。赤に於いて彼自らの人格を見出し、青そのもの、中に彼の全我を感じると云ふ藝術的な活動は、全我の實質である、内面の明瞭性を離れて見ることは出来ない。内面の明瞭即ち無限な歡喜は、精神の總額ではなく、實質そのものである。恰もすべての形象は、それが形象である限り、擴りそのものを離れ能はざるやうに、あらゆる精神的活動は、この内性の歡喜を實質としなければならぬ。單純と呼ばれる精神の活動に於いても、又複雑と考へられる精神の活動に於いても、それらが精神的なるものである限り、内性の歡喜そのものを全一的に含んでおかなければならぬ筈である。藝術に於いて、題材そのものは、少しも藝術の實質を決定しないで、その中に流れる情趣、若しくは精神的なるものが、その眞髓を決定するのは、これが爲めである。一つの花の形象が、その構造に於いて單純であるにも拘はらず、複雑なる人體よりも、より深き精神を顯はし得らるゝ場合のあり得ることは、藝術の實質が状態そのものにあるのではなく、精神の内性そのものにあるからである。内性は外的な形

象の大小、若しくは單複を以つて決すべきではない。内性自身の、獨自な無限の創造に、俟たねばならぬからである。

統一的自我が經驗の量的總額を超越するやうに、それは量的な分割をも超越する。若し分割され、分割を許さるゝが如き全體ならば、それは眞の全體でないからである。統一的全體は、常に全體でなければならぬ。それが一つの花の形象に於いて顯はさるゝ時にも、又一つの人の形象に於いて顯はさるゝ時にも、同じやうにそれは全體である。恰も總ての形象が、全體的に延長自體であると同じである。其は分割的な區分を許されざる、精神の領域に於ける、自全の活動だからである。純粹な内性に満ちた一つの花の形象は、それ自身に於いて全精神であり、全宇宙である。全體なる概念は、量の概念の究極である云ふよりも、質そのものであると考へられる。トーマス、アクイナスのやうに、最も普遍なるものは、たゞ一つのみあると考へるならば、それは最早や量の概念を超越する。それは純粹にたゞ一つのものは、多を豫想しないが故に、量の性質を失ふからである。量を超越することは、分

割を超越することである。一つの花は、内的な歡びに於いて全宇宙である。藝術の色は、單なる感覺ではなく、彼の全人格である。考へられるのは、この根源に依らなければならぬ。人格の全體的なるものは、對象の如何に拘はらず、全體的にそれを實現する。統一的自我を全體的な質とし、無限の歡びであること、依つて、こゝに初めて我々の具象的經驗に到着するのである。

藝術に於ける力の考も、亦これと同じやうに考へられるであらう。藝術に於ける力は、物質的の力ではない。それは内包的な質である。力の藝術と呼ばるゝものが、線や面の雄勁なことに限られるとするならば、それは眞の精神的な力ではない。藝術に於ける力は、精神自體が自らを支持する力であり、それ自らに於ける無限の満足を確實にする作用である。云はゞ無限な内面的な明瞭性と歡喜とが、象徴的に名けられて、力と呼ばれるに過ぎない。強い筋肉の活動が、力を顯はすと限らず、又あわかな一もこの花に、無限な内面の力が顯はされ得るであらう。一條の線が、全體の面よりも強いものを顯はし、一つの靜物が、大なる風景の全面よりも、強

いものを顯はすのは、それらの力が、外的な如何なる力でもないからである。内面の歡喜は、そのこと自身に於いて、純粹に自ら存在し得る能力を實現する。物力を顯はさんとするものは、却つて力を失ひ、物力を離るゝものは、却つて眞の力に溢れる。この眞の力が全一的であり、統一的自我である。

かくして精神的な純粹藝術的な歡喜は、如何なる感覺的な快感からも區別せられるであらう。それは精神そのものゝ根本的自覺なるが故に、多様な精神の變化其ものではない。従つて歡喜は、又悲哀の形に於いても見出されるであらう。それは感覺的な快感が粗雑であり、變り易きものであり、且つ外面的であるのに、悲哀はその質の精純な點に於いて、その連續的な點に於いて、そして精神そのものゝ神祕である點に於いて、最も内的なるものに近づくからである。ワルイドは感じてゐる。歡喜と笑ひとの背後には、粗雑な無感覺な一つの氣質が隠される。然し悲哀の背後には、同じやうに悲哀がある。快樂は常に假面を着る。然し苦痛は如何なる假面をも持たぬ。藝術の眞理なる者は、本體と現象との相應でもなく、影と形

との類似でもなく、月には月を見せ、水仙には水仙を見せる、谷の銀の泉でもない。藝術の眞理は、物が物自身と一致することであり、内界の表現された外界であり、具體化された靈魂であり、精神を具へた肉體的本能である。この理由よりして、表裏なく萬有を一つの流れにつゝむ悲哀に優さる眞理はない。偉大なる藝術の特徴たるものは、この悲哀である。藝術家がたわす求めるものは、靈肉が一つである存在の状態である。かゝる状態をあらはすものは、決して乏しくない。印象の多感な點に於いて、地や空氣や霧や町から、靈魂の外衣を作り、情趣や色調の病的な悲しみの同情を顯はす點に於いて、近代の風景畫は、この一つのものゝ状態をあらはすのである。それは彫刻に於いて、希臘が完成したと同じものを、繪畫に實現したのである。あらゆる主題が表現の中に融化し、表現を離れて存在し能はぬものは音樂である。音樂はこのことの複雑なる例であり、子供と花とは同じものゝ單純な例である。かやうに顯はれ得る一つのものは、悲哀に外ならぬ。悲哀は誠に生命と藝術との最高な典型である。悲しみのある處に聖地があるやうに、それのある

處に美と藝術とがある (De profundis) と。悲哀はあらゆる精神に遍通する點に於いて、感覺的な喜びや笑よりは、更に根本的である。それは連続的な一つの情趣として、全精神の根本に流れるのである。然しこの悲哀の實質は何であらうか。

精純な悲哀は、多様な感覺の奥を流れる一つの情趣なるが故に、個々の感覺に結び付く一つの感情ではない。自己其ものに依つて、自己を支えてゐる精神の内面を構成する働きである。たとひそれが苦痛を伴ふにしても、粗雑な外面的なものでなく、精神的なるもの、自我そのもの、内面に流れる、精純な心の性質である。關心を離れた藝術的な世界に於ける悲哀が、精神そのものを構成して行くやうに、純化せる悲哀は、精神そのものが自分を構成する一つの過程である。従つて悲哀はそれ自らに於いて、一つの慰めであり、一つの満足である。悲哀の殿堂の中にあつても、ものみなを、同じ薄青い光に包んで行く藝術の心境はそれ自身に於いて無限の満足である限り、精神そのもの、喜びであらねばならぬ。「喪に居る者は悲をあるじとし、愁に住するものは愁をあるじとし、衰に住するものは衰をあるじとす。淋

しきなくばうからましと西上人のよみ待るは、淋しきをあるじなるべし」(嵯峨日記)。愁と衰と淋しきとに、限りなき満足を見出す。精神の喜びは感覺の華やかではない。それ自らに於いて、無限な内容を構成し得ることの満足である。自足の活動としては、たゞ一つであるが、そのもの、顯はれとしては、喜びの形ともなり哀愁の流れともなるであらう。スピノーザの言葉に依るならば、受動的な感覺に依つて呼び醒される喜びでもなく、悲しみでもなく、精神そのもの、自足の活動として生れ来る、能動的な喜びであり、無限の真理そのものに依つて基礎付けられる静寂の流れである。

統一的自我を通して、一つの色を見、一つの音を聞くこととは、この内的な自足の喜びに於いて、独自の色と音とを創造することである。そしてそれはたゞ一つの色や音を創造するのではなく、このとに依つて全宇宙を構成するのである。

第三章 形象としての藝術

一 形象的なるもの

純粹藝術的活動の融合に於いて、精神は無限の内性を創造する。然しこの活動からして、どうして形象的な藝術が導き出されるであらうか。

我々は純粹藝術的活動に於いて、精神の實質たるべきもの、即ち藝術の内容たり得るものを見出したのである。即ち表現することに對して、表現されるべき精神的内容を知ることが出来たのである。従つてこのものを表現することに依つて單純に形象的な藝術が構成されると考ふべきであらうか。

クロイチエに依るならば、表現に依つて客觀化されないものは直觀ではない。それは感覺であり、自然である。直觀が眞の直觀である爲めには、それは必ず表現

を持たなければならぬのである。この考は、直觀的なるもの、精神的なるものが、自らを完成するには、なくてはならぬ最後の階段であるとするのである。恰もそれは論理學に於いて、概念構成の最後の完成は、それ自身の名辭を見出すことにあると考へるのに同じである。表現なくば直觀は完成することは出来ない。表現はそれ程、直觀そのもの、實質である。然しこの表現の考には、精神の内、外、又は表現するものと、されるものとの對立が含まれてゐる。表現される内的のものは、精神的過程であり、表現する外的の形象、若しくは運動は、物質的なもの、過程である。精神的なもの、何うして物質的なものに表現されることが出来るであらうか。又物質的なものが、全く性質を異にする精神的なものを、何うして表現することが出来るであらうか。かりに物心は一如であり、精神的過程に於いては、あらゆるものが悉く精神なるが故に、物に於いて表現すると云ふのは、精神に於いて表はすと云ふことに過ぎない、と云はれ得るかも知れない。若しさうであるならば、それは精神的な活動の無限な連続であつて、内のものを外に表はすと云ふ意味は成立し

ないのである。若し表現が精神そのもの、無限の連鎖であるとするならば、それは純粹藝術的活動自體であつて、形象的なもの、創造と云ふことは、成立しない筈である。即ち物心の二元を許すならば、表現と云ふ理由のみに依つて、二つのものゝ裂罅を結ぶことは出来ない。又若し精神の一元とするならば、精神の過程を、物に顯はすと云ふ、表現の意味は成立しないのである。従つて如何なる意味よりするも、直觀の完成條件として、表現を許すことは出来ないのである。

表現と云ふ考が、精神的なものを形象的なものに顯はす活動であるとするには、こゝに物心の關係、即ち精神的なるものと形象的なるものとの意味を、嚴密に規定しなければならぬ。純粹藝術活動が精神其ものゝ實質であり、物我相忘の世界に於ける、無限の創造であるとするならば、この活動の外に、如何なる形象も存在すべきではない。このものは自己存在であり、無限の歡びなるが故に、他の如何なるものをも求むべきではない。従つてこれは、他の世界への表現に依つて、初めて自分を完成させるものではない筈である。この自足の活動に於いては、藝術の形象の

みならず、あらゆる自然もその物質的な性質を遊離し終つて、それはそのままに於いて無限な精神自體である。こゝには如何なる形象も、如何なる表現も、又如何なる象徴も成立しないのである。しかし純粹藝術的活動は、第二編に於いて考へたやうに、このものゝ自己制限として、物を規定しなければならぬ必然に置かれる。自由な創造的活動が、何うして自らを限定しなければならぬか。それは寧ろ理性を超越する。若し強いてこれが理由を求むるならば、自己活動は、なくてはならぬ條件を認めなければならぬから、と云ふに歸するであらう。それは絶対肯定の實體そのものが、部分肯定として、個物若しくは雜多を認めなければならぬ必然と同じ關係である。そしてそれは、我々の論理的な活動が、相對的なものを理解しなければならぬ限り、産み出されなければならぬ必然的な範疇であり、又我々の精神自體が論理の相對を離れて、自らの絶対を承認し得る限り、必ず遭遇しなければならぬ精神そのものゝ矛盾である。かゝる理由に依つて、我々は純粹藝術的活動の自己制限を許さなければならぬ。この自己制限に依つて生み出される過程が、物であ

る。かくして成立する物は、それ自身の必然的法則として、全物質的現象を規定する自然法を構成する。かくして物の世界、並びに形象の世界が成立する。この形象の世界と純粹藝術的活動との關係が、表現の問題であり、實に形象的藝術の問題である。

二 象 徴

純粹藝術的活動の自己限定として、物があり、自然法が與へられるとするならばこの二つの者の關係が、嚴密に考察されなければならぬ。純粹藝術的活動は、無限な自己完成の歡びである。然し物は固定せるものであり、形象は凝固せる精神の形である（ベルグソン）。純粹藝術的活動は、自らの條件として、物並びに形象を産み出したのであるが、この固定せる形象に向つて、自己完成の歡びを象徴化しよう

とする一つの要求を持つ。それは純粹藝術的活動が、このことに依つて、自己を完成せんが爲めでもなく、又自己の内容を創造せんが爲めでもない。若しさうであるならば、純粹藝術的活動は、自己充足のものでないことになるからである。プロチノスの云ふやうに、神は完全たらんが爲めに、創造するのではないからである。自己限定に依つて、形象を産み出すと同じやうに、此形象に於いて、自己を外面化し象徴化し、精神そのもの、歡びを、形象の世界に記録しようとするのである。この記録と象徴とは、物化せる精神を導く爲めである。物化せる精神とは、自己の物化せる精神でもあり、且つ又、他の人々の物化せる精神である。それは精神自體に對するものとして、物化せる精神そのものが認められ、次にそのものに付いて、自他の區別が考へられるからである。若し純粹藝術活動が、如何なる物的過程をも認めないならば、そこに形象化の問題もなく、象徴の問題もない筈である。形象の問題は精神の物化に根元する。然しそれは、精神自體の實質的完成の爲めではなく、なくてはならぬ條件的なもの、爲めである。従つて形象化と云ひ、象徴と云ひ、記録と云

ふのは、純粹藝術的活動の實質を構成するのではなく、寧ろその條件的なものに屬すると考へなければならぬのである。

一般に象徴は、有限なものに依つて、無限なるものを顯はすことであり、相對的な形象を以つて、絶對的な精神そのものを實現することである。然し象徴されることに依つて、無限なるもの、又は絶對的な者は、その性質を完成するのではない。例へば、カントに依るならば、感覺的な赤は、誠實なる道德的精神を象徴し、白は純潔としての精神を象徴するであらう。然しこの象徴に依つて、誠實並びに純潔なる精神自體が、完成される筈はないのである。象徴の如何に關はらず、誠實は誠實であり、純潔は純潔である。純粹藝術的な歡喜は、色に依つても象徴され、音に依つても象徴されるであらう。然しこのことに依つて、絶對自體なる純粹藝術的活動が自分を完成するのではない。たゞ精神的なものに、形象的な衣を得たと云ふまでである。「藝術家がたゞす求むるものは、靈肉が一つである状態である」と云ふのは、形象的創作の理想である。然し靈が靈のみに於いて、不完全なるが故に、肉を

求めなければならぬと考へるならば、それは絶對的なもの、眞性を奪ふことであり、自足のもの、完成を認めないものである。形象の世界に於いて、精神が完全に實現されなければならぬと云ふのは、形象的創作の理想であるが、然し形象的創作のみが、全精神活動の領域ではない。このもの、根本として、精神が精神として無限に、自由に、存在し得る絶對的活動を承認しなければならぬ。従つて精神は象徴に依つて完成するのではなく、精神が形象化を認める限り、止を得ざる一つの過程であると考ふべきである。

形象は有限であり、精神は無限である。無限のものが、どうして有限のものに、象徴されることが可能であるか。相對的なもの、第一原理として、絶對を認めようとするとも、それらは全く質を別にせる、相對と絶對とである限り、何うしても、これを結合さすことは出来ない筈である。何うして精神的なものが、形象的なものに依つて顯はされ得るのであらうか。

相對的なものと絶對的なものとの關係を、合理的に規定することは不可能であ

る。若しそれが可能であるならば、絶對は相對の一部にならなければならぬからである。然し二つのものゝ關係は、たゞ合理的關係のみではないのである。合理的活動の究極に於いて、相對的なるものは、矛盾に達着する。カントの背反律はそれである。この矛盾は、合理的活動の究極であるが、このものゝ内性を考へることに於いて、我々は絶對そのものゝ内性に到着するであらう。換言するならば、論理的關係に於いては、相對的のものゝ絶對的のものとは、矛盾に依つて結合される。有無の對立を離れると共に、有であり同時に無であるのを、了解することに依つて相對的なものゝ彼岸に存在する、確實な根源的な活動を知ることが出来るであらう。純粹藝術的活動の象徴も、亦合理的關係を超越する。精神的なるものゝ眞髓と、形象的なるものゝ必然とが、超論理的な關係に於いて結合されるのである。それは結合され得ると考へらるゝ限り、結合され得るのであり、結合され得ないと考へらるゝ限り、結合され得ないのである。彫刻家は青銅に於いて考へねばならぬ (The sculptor must think in bronze) と云はれる。然し彼の思惟が、青銅そのものでない

限り、二つのものは別である。又彼の青銅が、彼の思惟をあらはすのに、最も自然であり、最も近いものである限り、二つのものは同じである。月夜の靜寂は、如何なる音でもない。然し音楽家に取つて、音已外にこのものを顯はすものはないのである。精神的なるものゝ實質を自覺し、且つ色や形や音や言葉の必然的な意味を了解し得る精神に取つてのみ、象徴が象徴たり得るのである。精神が精神として存在し得ることを、考へないものに向つては、如何なる形象の藝術も藝術ではない。色と形との結合であり、音の連続であり、言葉の流れであるに過ぎぬ。精神の自覺に依り、又形象の必然に依つて、この間の關係を見出し、精神の爲めに形象を支配するものが、藝術家である。従つて藝術家は、彼の純粹な内的なものゝ、形象の外面的な法則との間に、超論的な必然な關係を見出す人である。少くとも形象的な藝術は、かゝる必然に依つて成立し、象徴はかゝる超論理的な關係に依つて、構成されると考へられるのである。

若し藝術家が形象の法則を知るも、内的なものに於いて純粹でなく精神自體で

なかつたとするならば、彼は眞の藝術家でないのみならず、精神的存在としても承認すべからざるものである。それは彼は相對的な、有限的なもの、一端を知るにしても、絶對無限な内容の純粹を持たぬからである。形象の藝術は、必ず純粹藝術的活動を待たねばならぬ。それ自らの無限な歡びより生れ來る形象でなければ、それは藝術としての意味を持たぬのである。藝術家は眞の人間であればいゝのであるか。又人間已上に特有な表現能力を持たねばならぬかの問題が、こゝに於いて考へられるであらう。この問題は、藝術家はたゞ純粹藝術的な活動を自覺すればいゝのであるか、又この自覺を象徴し得る能力を持たねばならぬかの問題として考へられるであらう。形象が精神そのものでない限り、精神の純粹なものを自覺することも、形象を支配する能力を具へなければ、藝術家たることは出來ないと考へられるかも知れない。これは理論の一つの過程である。然しこゝに根本の問題が存在する。

純粹藝術的活動はそのもの自身に於いて無限の完成である。これが形象化は

一つの限定に過ぎない。若しこの限定が純粹な藝術的活動に取つて、必然のものであるならば、それが無限な完成であると云ふ理由に依つて、完全な形象を生み出すべきである。恰も完全な概念が、必ず存在を含むと考へられるやうに、完全な内的自覺は、それが要請する限り、完全な形象を産み出し、その必然な象徴を創造するであらう。神の觀念に於いては、存在を離れて完全の義が成立しないやうに、若し形象化が精神の必然な要求であるならば、象徴化を離れて自己完成の藝術的活動は成立しないからである。従つて純粹藝術的活動が、形象化の必然を要求するならば、それは形象を構成する爲めに、自然を支配するの能力を持つ筈である。あらゆる自然界の結晶體が、外部の型に依つて鑄造されたのでなく、その實質に依つて構成されると同じやうに、純粹な藝術的活動は、その内容の成立と同時に、必要な限りそれに必然な形象を見出す筈である。若しそれが見出されないのであるならば、純粹藝術的活動に向つて、形象的なものは要求されないものであり、それは形象なしに無限の完成であるべきである。至純に徹するものは、あらゆる形象の規

約を超越して、而も必然的な形象を産み出すのである。それはたゞ精神的なるものに於いての規範であるのみならず、形象の世界に於いても特有の法則を與ふべきだからである。内的な藝術的活動に於いて、絶對そのものに徹することは、やがて全相對を支配する能力を具へることだからである。従つて純粹藝術的活動は純粹な藝術的なものを自覺することであり、純粹に人たることであつて、特に表現の能力又は技巧の能力を備へて、初めて完成されるのではないのである。純粹な精神そのものであることの外に、如何なる藝術家も存在の餘地はないのである。

純粹藝術的活動の要求である限り、成立し得る形象藝術の意義は、何にあるであらうか。それは形象に於いて精神的なるものをあらはすことであり、即ちそれは象徴である。象徴は畢竟形象に依る、精神的なるものゝ指標である。固定し凝固せる形象を通して、精神的なるもの、自存であるものを指示するのである。若し形象に於いて、この精神的なるものを了解しないならば、それは象徴の意味を失ひ、又藝術としての眞性を失ふ。畫かれたる靜物は、形象そのことに意味があるのではなく

この形象を通して顯はされたる、精神的な靜寂な歡びであり、精神的な自覺の光である。この光そのものゝ中に滲透するならば、形象は最早や形象の意味を失つて無限に内的なるものを實現するのである。たゞ限られた一つの靜物の状態を見るのでなく、このものゝ眞髓なる自覺の光に於いて、全我を包攝するのであり、同じ光の中に萬有を構成するのである。一つの風景畫は、自然の一部ではなく、全宇宙を新しき光に於いて再造する基本の一點である。一篇の詩は、あらゆる人間の新しき眞實を創造する根源の光である。形象の藝術は、そのものゝ必然的展開として、そのものを超越することであり、且つ純粹藝術的なものゝ實現し得る心境を拓くことである。この心境は作家のみの世界でもなく、鑑賞者のみの世界でもない。創作と鑑賞との區別を超越せる、普遍精神そのものゝ自由な創造である。作家のみが作るのではなく、見るものゝみがか導かれるのでもない。能動と受動との區別を離れ、精神そのものゝ歡びを見出すことに無限の創造があり、無限の恍惚があるべきである。作るものが見るものよりも深い精神を知るのでもなく、見るも

のは永遠に受動的に見るのみでもない。作るものと見るものとは合一して、無限の創造自體たるべきである。形象の藝術はこの活動を拓く契機に過ぎないのである。

三 自然と天才

カントは、藝術は自然のやうでなければならぬのであり、苦んだあとが見てはならぬと考へ、又自然が藝術のやうに見ると美であるが、藝術は自然のやうに見て、而も藝術であること云ふことが自覺されなければならぬと考へてゐる (Kritik der Urtheilskraft, I. Th. § 45.)。これは純粹藝術的活動に進む契機としての、形象藝術に付いて記述するに過ぎぬものである。藝術が自然のやうに見え、苦しんだあとがあつてはならぬと云ふのは、人爲的な彫琢のあとが、自己目的の活動たる、精神自

體を指示するのに適切でないからである。然し純粹藝術的活動自體より考へるならば、藝術と自然との區別があるべきではなく、又天真と彫琢との差別があるべきではない。純粹なるものを導く限り、彫琢も天真であり、人爲も自然である。何を斧鉞彫琢のあとと云ひ、何を天真の發露と云ふべきであらうか。それを決するものは、自己活動の純粹藝術そのものでなければならぬからである。又自然が藝術のやうに見ゆるならば、美であること云ふのは、純粹な藝術的なものを通して、自然が藝術であり、美そのものであることを考へたものである。然し藝術は自然のやうに見えて、而も藝術であること自覺されなければならぬと云ふのは、自然を以つて自然法に依る自然と考へるからである。藝術が藝術であること云ふ自覺は、關心的な存在ではないと云ふ自覺に外ならぬ筈である。然し眞の無關心の自覺は、それをさへ超越しなければならぬ。それは無關心の自覺は、特に關心に對立する識別的な自覺だからである。純粹藝術的活動は、かゝる自覺を超越する。藝術であることこの自覺を離れると共に、自然そのものとの對立をも離れる。カントの考は、たゞ

形象的な藝術が、純粹な藝術を導く一つの過程として、かくの如き自覺を認めると云ふに止めなければならぬ。形象の藝術には、かゝる自覺も含まれるであらう。然しこの自覺が藝術たることの實質ではない。實質的なものゝ構成に當つては、かゝる過程を経べきである。云ふべきである。形象的藝術の鑑賞は、形象に惹き起されながら、而も形象的なるものを超越しなければならぬからである。藝術の形象が象徴であると云ふことは、やがて超越すべきあるものを、そのものゝ中に含むと考へなければならぬのである。

同じようにカントの自然は、天才を通して藝術に規則を與へると云ふ考も、純粹藝術的な立場から批判されなければならぬ。自然とは自然法に依る自然でないことは明かである。若しそれが自然法に依る自然ならば、その立法は藝術を構成せず、科學を構成するからである。藝術に規則を與へる自然は、合法性に依る自然自體ではなく、目的の豫想に依つて可能なる自然でなければならぬ。それは合目的的な藝術は、目的的なものゝ源泉を待つて成立すべきだからである。換言する

ならば、絶對的なものを基礎として、相對的なものゝ中に象徴さるべきだからである。従つて自然が藝術に規則を與へると云ふことは、自由が藝術に規則を與へると云ふことであり、目的的なものが、かゝる自然の實質として、藝術に規則を與へると云ふことである。自由と目的とは、絶對自體であり、それ自らの存在なるが故に、こゝに考へらるゝ純粹藝術的活動そのものであらなければならぬ。故に自然が藝術に規則を與へると云ふことは、純粹藝術が自然の形象として、形象的な藝術に法則を與へると解すべきである。藝術の立法者たる自然は、自然法に依る自然ではなく、精神自體でなければならぬからである。藝術家に取つて自然は無限であり、絶對であり、神祕である。然しそれは彼の精神が、形象の世界に向つて無限であり、神祕だからである。云はゞ、精神自體が、自然と呼ばるゝ形に於いて、藝術に彼自らの法則を與へるのである。純粹藝術の法則は、無限な内包的な律動そのものである。自然の間に顯はれた精神の律動に依つて、藝術家は彼の形象的な素材に、内的な律動を與へるのである。造化に參するのではなく、造化其ものが自己で

あり、精神であり、自覚だからである。

更にカントの所謂天才とは抑も何であらうか。

藝術の實質たる純粹藝術的活動は、あらゆる對立を離れ、あらゆる量的な區分を超越する。あらゆる個性は純粹内包的な無限の質に融合するが故に、この世界に於いて特に天才と呼ばれ得る、特殊の精神活動を認むべきではない。あらゆるものが、それ自身の存在に無限の歡びを認めてゐる世界に向つて、精神的な優劣を見出すことは、出來ない筈である。純粹藝術の世界に於いては、精神の至純そのものが無限の立法者である。其己外の如何なるものゝ區別も存在すべきではない。若し純粹藝術的活動に對する、天才の能力を求むるならば、それは精神が精神としての、必然な道程を歩み得る無限の能力である。如何なる外面的な關心的な障害にも惑はず、如實にそのもの自身の道を歩むことである。このことを離れるならば、技術並びにそれに關聯する能力は、自然的であり關心的である。カントは實踐的なるものを區別して、技術的實踐と道德的實踐とを考へてゐる。そして道德的

實踐のみが眞の實踐であるとする。それと同じやうに、我々は精神の能力を、自然的能力と純粹藝術的な能力とに分けることが出来る。精神そのものがそのものたることの出来る能力、これが純粹藝術的能力である。さうでないものは、たとひそれが色彩音響の調和に於いて、感覺的に卓越せる能力を實現し得ることも、それは精神そのものに立脚しない能力なるが故に、自然的能力である。自然的能力に於いては、優劣と天才とを規定することが出来るかも知れない。然し精神自體の絶對的活動である、純粹藝術的な能力に於いては、それが絶對的なるが故に、特に天才と呼ぶべき、特殊の存在を許すべきではないのである。

殊に形象の藝術に於いては、天才の存在が一般的に認められてゐる。感受性の機能に於いて、表現の能力に於いて卓越せる天才が、實際我々に多くの優れた作品を與へてゐるからである。然し其は與へられたる形象である。其が眞の藝術であるか否かは、形象的な感性と表現との能力に依つて、決定されるべきではない。若し其が單に官能的なあるものと呼び醒すに止つて、精神そのものゝ自存の歡びを

知らないものであるならば、音樂の形に於いて歌はれ、繪畫の形に於いて畫かれ、詩の形に於いて綴られるとするも、決して眞の藝術として許すことは出来ないのである。自然的な能力の世界に於いては、天才が認め得られるであらう。純粹藝術の世界に於いては、最早や能力の卓越を意味する天才は認め得られないのである。形象的藝術が、自然的な能力を離れて精神そのものであればある程、この世界に於いて如何なる精神的な優劣も許されないからである。

ル・ミ・ロ・シ・ノ・ロ

大正十三年十月二日印刷
大正十三年十月五日發行



純粹美學原論奥附
定價金貳圓五拾錢

著者 小笠原秀實
發行人兼印刷人 西川才一郎
東京府戸塚町上戸塚三百六十四番地

發行所

創生閣

東京市外戸塚町上戸塚三百六十四番地
振替口座東京六八八二三番
京都市下京區本町十丁目
創生閣支店
振替口座大阪五七三〇五番

印刷所 創生閣印刷部

1965

終